

# Japanese man In NY (ニューヨーク生活)



(Photo: Bethesda Terrace @ Central Park)

## 《セントラル・パーク》

ニューヨークに居た頃、一番良く足を運んだのがセントラル・パークだった。仕事はレストランのウェーターだったから、毎日出勤していたわけではなく、ディナーからの出勤も多かったため、天気の良い日などはふらつと訪れることも多かった。

アメリカでは日本ほどはっきりとした春夏秋冬という季節感を感じることは少ないという印象を受けるが、ニューヨークは比較的四季の移り変わりを感じやすい都市で、特にセントラル・パークに限っては、四季の変化をはっきりとすることができる場所だった。

池に氷が張り、あたり一面が雪景色に覆われる冬の時期には最高に美しい顔を魅せるが、鳥がさえずり、リスたちが芝生を走り回り、穏やかな日差しの中歩いているだけで癒される春の季節も堪らなく良かった。夏になると、よく芝生の上でラジオを聴きながら、のんびりと日焼けをしていたものだが、落ち葉が舞い、何となくもの悲しくなる秋のセントラル・パークも格別だった。こんな風に、一年を通して常に心を癒してくれた特別な場所だった。

セントラル・パークの西側、アッパー・ウエストにあるアパートで暮らしていたため、この場所に歩いて数ブロックで行けるというのは本当に幸運だった。また、アッパー・ウエストは比較的閑静なエリアではあったが、やたらと老人の姿が目立つ場所でもあった。早朝や夜間のマクドナルドの座席の大半は老人が占めているという日本ではあり得ない光景が目立ったのも今では懐かしい思い出だ。

アッパー・ウエストにもセントラル・パーク内への入り口は幾つかあったが、あのジョン・レノンが暮らしていた場所（現在オノ・ヨーコが暮らしている）としても有名なダコタ・ハウスを横切って、72丁目の通りからパーク内に入ることが多かった。入り口付近では、よくブリッツェルやシシカパブ、夏になるとレインボー・カラーのイタリアン・シャーベットなどを売っている屋台が出ていた。

平日の午前中はさすがに人は少なかったが、夏の天気の良い日の朝などには、早足でサブウェイの駅を目指すサラリーマンや学生たちの姿を横目に見ながら、短パン&Tシャツにサンダル姿でテクテクとセントラル・パークに向かったものだ。72丁目の入り口を進むと、ジョン・レノンの死後に造られたイマジンの碑やストロベリー・フィールズと呼ばれる広場があり、その脇にちょっとした芝生が広がっていて、その辺りでよく寝転びながらのんびり日焼けをしていたのだ。

日差しを浴びながら仰向けに空を見上げると、様々な形をした白い雲がゆっくりと漂っていき、ラジオからは懐かしいオールディーズやスムーズ・ジャズなんか聴こえてくる。「日本でサラリーマンをしていたら、今頃こんなこと出来ないよなあ」とか「日本の友達みんな今頃何やってんだろう」なんて、（真剣にはではなく）ポーっと考えながらウトウトするのが贅沢この上ない気持ち良さで、本当に幸せな一時だったことを覚えている。

平日と違って、日曜日になると至る所でグループでダンスを踊ったり、バンドをやっていたりと、それを見に来る人達もたくさんいて、セントラル・パークが一段と賑やかになった。よくおじいさんのトロンボーン奏者がリーダーのジャズ・バンドが木陰で演奏していたが、その年季の入ったトロンボーンでミディアム・テンポの「フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン」なんかを演奏してくれて、とても良い気分浸ったことも懐かしい。そして、現在はリーダー・アルバムをリリースしたり、TKYなどで活躍しているベーシストの日野賢二も、その頃はよくセントラル・パークで演奏していた。

また、ウエスト72丁目から入り、ストロベリー・フィールズを下ると有名な大きな池があるが、あの辺りは何度訪れたか分からない。こんなところを散歩道にしている自分の日々の暮らしにいつも感動しながら歩いていたのを覚えている。今では遠い昔のようだが、生活は貧しかったけれど、精神的には本当に贅沢な毎日だったと思っている。

その他にも、動物園やボートハウスに小さな野球場、「タヴァーン・オン・ザ・グリーン」というお洒落なレストランもあったり、アッパー・イーストには有名なメトロポリタン美術館が隣接していたりと、丸一日過しても回りきれないほどのたくさんの名所が点在している。

マンハッタン自体は狭い島だが、真ん中にドカンと陣取っているこのセントラル・パークは、ニューヨークで暮らす人々の憩いの場所、癒しの空間として最高の一時を与えてくれる。いつかまた、ここを散歩道に出来るような暮らしがしたい。